





誰だって  
人生の食卓で  
悲しみや苦みのフルコースを味わいたくはない  
けれど  
カレーの人参や  
野菜炒めのピーマンを  
皿の端っこによけ続けていると  
いつかはそれらを全部  
口の中に押し込まなきゃいけない時がやってくる

逃げていた幾つもの問題が  
ガラガラ音をたてて倒れこんできたら  
私は難なく解決しまくり  
ざまあみろって言ってやろうと  
まだ気配のない頃は思ってた

手帳のカレンダーは  
あの日々に空白が連なっている  
漂流者が刻む”時”のように  
本人にしか見えない軌跡を残して

今となってみれば  
闘いの相手が存在したのかさえ不確かだ  
わずか一平方メートルのぬかるみで  
足踏みしてることに気づかなかっただけなのだろうか

私がある本に出会ったのは  
まさにそういう時期だった  
飛騨高山へ旅した際  
古い町並みを散策中  
ふと覗いた粹なブティックの片隅で  
無造作に2、3冊平積みしてあった

なぜか  
引き寄せられるように  
頁をめくったとたん  
今まで目にしたことのないような言葉が並んでいた

絶対に離してはいけない  
と感じた  
こういったことを信じないタイプの間人だが  
この時は違っていた

本は人並みに読んできた  
それぞれに惹かれるものがあって

その時々を彩ってくれた  
けれど  
生涯傍におきたい本は限られてくる  
現在  
私の手元にある3冊の内の一冊が  
「天使の鼓動」だ  
魂の本となるまでに時間は掛からなかった

たぶん  
この世の半分は楽園  
なのに  
どうして  
私の心は  
影にばかり焦点を合わそうとするんだろう

忘れるに限るものが  
ふいに浮かび上がって  
防御の壁がすり切れるまで暴れまわったあと  
いつも  
言いようのないみじめさに襲われる

鉛のように重い固まり  
それは他所からやってくるんじゃない  
私がしがみついて放さないからここにあるんだ

天使の鼓動が  
これらの混沌を  
完全に解いてくれたわけではない  
しかし  
大小さまざまな穴が開いて  
殻の外で機を待っていた光が  
私へたどり着いてくれた

誰にだかわからないが  
ありがとうと言いたくなった  
ほんとうの幸運とは  
こういうことかもしれない  
そう思える自分に満足している